

GUNMA ARTIST IN RESIDENCE PROGRAM 2022

AIR アートプロジェクトは、群馬県が進めているアートの力で群馬を元気にする「アーティスティック GUNMA」の一環として、アーティスト支援、地域振興、アート教育・体験の好循環を目指して2022年度より始動しました。第1回となる「GUNMA ARTIST IN RESIDENCE PROGRAM 2022」には、現代美術、写真、陶芸、絵画の分野で活躍する若手アーティスト5人が参加しました。

群馬県は、上毛三山や谷川岳、尾瀬に代表される美しい自然や豊富な水資源に恵まれています。その環境で育まれた多彩な農畜産物や多様な効能を持つ温泉を有する魅力あふれる地域です。アーティストたちは、忙しい日常から離れて、県内のアーティスト・イン・レジデンス（AIR）施設に滞在しながら、地域の歴史や文化、物語に触れ、また地域の人々との交流からインスピレーションを得て、リサーチ活動や作品制作、エデュケーションプログラムを行いました。

本書は、若い感性と意欲にあふれる5人のアーティストの活動を記録したものです。独創的で個性溢れる発想で作りに上げられたアート作品と、アーティストの視点から表現される群馬の魅力との出会いをお楽しみください。

結びに、多大な御協力と御支援を賜りました各 AIR 施設や県立近代美術館、並びに御協力をいただきました関係者の方々に心から感謝と御礼を申し上げます。

2023年3月

AIR アートプロジェクト運営委員会

参加アーティスト

| | |
|---------|-----|
| 江上越 | 4p |
| 山本千愛 | 8p |
| 小野澤弘一 | 12p |
| 頭山ゆう紀 | 16p |
| 佐藤令奈 | 20p |
| 運営委員 | |
| 青野和子 | 7p |
| 茂木一司 | 11p |
| キール・ハーン | 15p |
| 片山真理 | 19p |
| 山重徹夫 | 23p |



江上越（えがみ・えつ）

現代美術家。2021年フォーブスが選ぶ世界を変える30歳以下の30人に最年少アーティストとして選出。同年文化庁新進芸術家派遣プログラムでニューヨークに渡りペンシルベニア大学、アジアソサエティに日本戦後現代美術第三世代のアーティストとしてトークイベントに招かれる。自身が持つ海外での実体験を元に、ズレや誤視、誤聴などのミスコミュニケーションを可視化することによりコミュニケーションの本質を探り、作品を制作する江上越。パリボンビドゥーセンターのキュレーター Julian Champion は「江上越はそれら特異性を誤解にとどまることなく、人間の営みにおける創造の源とする。そこに美しさがある」と評する。ドイツ・中国への留学後、近年北京国際メディアアートビエンナーレ、ボストン美術館のアーティストトーク、文化庁新人芸術家派遣にてニューヨークに派遣されるなど国内外で目覚ましい活躍を続けている。

エデュケーション

- 2022 北京・清華大学ポストドクター在籍
- 2020 令和2年度文化庁新進芸術家海外派遣プログラム・ニューヨーク
フォーブスが選ぶ世界を変える30歳以下の30人 Forbes 30 UNDER 30 を受賞
- 2019 Central Academy of Fine Arts (北京) 修士修了
- 2017 Karlsruhe University of Arts and Design (ドイツ) 留学

主な展示・プログラム

- 2023 「第三回新疆国際アートビエンナーレ《文明と交融》、新疆美術館、新疆
「The Rabbit Project」、フィリップス展示館、ニューヨーク
「江上越：行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」、
Whitestone gallery Singapore、シンガポール
- 2022 「にじいろー江上越個展」、Tang Contemporary Seoul、ソウル
「憑りつかれる魂ー江上越が問いかける近代、その地平」、ウッドワン美術館、広島
「Take over by Unit London」、Nassima Landau Foundation、イスラエル
「美術館之眼」、蘇州美術館、蘇州
「ワークショップ「伝わるかな?」、原美術館 ARC、群馬
「RAINBOW」、Chambers Fine Art Swiss、スイス
- 2021 「Facebook -Egami Etsu solo show」、Chambers Fine Art、ニューヨーク
「Social Distancing -Egami Etsu solo show」、A2Z PARIS、パリ
「Hello, Future, Where are we?」、CAFA 美術館、北京
「In a Moment of Misunderstanding, All the Masks Fall」、
Tang Contemporary、北京
「Collection Visit by Sam Shikiar」、グッゲンハイム美術館主催、ニューヨーク
- 2020 「VOCA 展 2020ー新しい平面の作家たち」上野の森美術館、東京
「CAF 賞 2020 ファイナリスト」、現代芸術振興財団、東京
「エントランスギャラリー Vol.1 江上越」千葉市美術館、千葉
- 2019 「ソヴリンアジアアートプライズファイナリスト」、大館当代美術館、香港
- 2018 「Bio Art Archive Drawer-Absence of Authority」、HDK、チューリッヒ
「第二回北京国際メディアアートビエンナーレ」、CAFA 美術館、北京

達磨

キャンバス、油彩

群馬でのアーティストインレジデンスに参加する機会を得た。初めて知ったが、群馬県高崎市が全国生産1位をほこる達磨は年間約90万個出荷され、群馬県の伝統工芸品に指定されている。高崎市の達磨はおよそ200年前に山縣友五郎が始めたとされている。また1829年の文献「高崎談凶抄」にて達磨を売る様子が版画として残っており、だるま市がルーツともいえる。もっとも、達磨は禅宗の開祖であり、5世紀後半から6世紀前半の中国で活躍した仏教僧侶である。ひげを生やし、耳輪を付け袈裟を羽織った姿であるが、それが近代以降厄除け、「七転八起」の縁起ものとして手も足も削ぎ落された、真ん丸な起き上がりだるまに変異する。

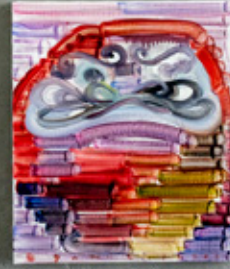
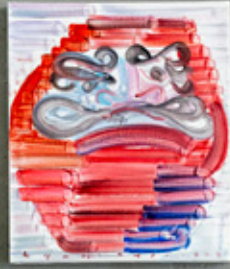
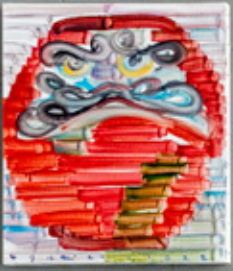
禅宗の開祖が宗教の枠組みを離れて、また縁起もののシンボル、大衆的民芸品として急速に広がったのは大変興味深い。ましてやクリスマス達磨、ハロウィンランタン達磨、干支達磨、侍ジャパン達磨、アマビエ達磨、12色だるま、選挙達磨など奇想天外に変身した姿に思わず笑ってしまう。なぜ「だるま」が本来あるべき姿の仏教を超えて異教のキリスト教や土着信仰、妖怪、ましてや商業、政治にまで広く消費されているのだろうか。私たちは一体何を信じているのか。受験シーズンの中、サブカルチャー化した達磨たちは多くの合格祈願を叶えるに違いない。

伝わるかな？

マルチメディア

「江上越：伝わるかな？」は原美術館 ARC にて行われた原美術館 ARC、群馬県、公益財団法人群馬県教育文化事業団主催のエデュケーションプログラムである。参加者は5人1組になり、代表者のみ渡された画像をみて、その答えをいわずにパイプを通して「それ」を次の人に伝える。聞いた人はイメージを膨らませながら自分の言葉でさらに次の人に伝える。人から人へ、最後はどんなイメージになるだろうか。パイプからは伝言する人々の声が聞こえるよ。視覚から言語表現へ、認識とは何か考えてみよう。どこまで私たちはわかりあえるのか。伝達する過程での差異を楽しもう。







運営委員 / 原美術館 ARC 館長 青野和子

江上越は、千葉県に生まれ、ドイツ、中国に留学後、国際的に活躍している新進気鋭の作家である。ミスコミュニケーションを可視化する挑戦を続ける、来県経験もないに等しかった彼女が、水と緑に囲まれた、移動も不便な榛名湖畔でのレジデンス経験を通して何かを発見する。それと同時に、そこで出会った人々と彼女自身との間に、何らかの共振が生まれることを期待し、初の「群馬 AIR」に推薦を決めた。

滞在中はほぼ毎日、外に出てリサーチ活動に没頭していたと聞く。休日も返上して付き添ってくれた教育文化事業団スタッフのおかげで、多くの地元文化関係者との面談が叶い、それぞれ長時間のインタビューに快く応じてくださったそうだ。ご多忙のなか、若い作家の申し出に丁寧に対応いただいた皆様方には、私からも一言お礼を申し上げたい。

結果、成果発表展には、「伝わるかな？」と題されたレジデンス期間中に実施されたワークショップ（誤聴ゲーム）の振り返りと、「達磨」といういかにも群馬らしいモチーフによる絵画作品群が並べられた。達磨は、伝統を受け継ぎながら時間のなかで消化／昇華され、新しい価値観をも反映して進化を続ける遅い存在として、作家にひととき強い印象を残したようだ。レジデンス終了後、自身のアトリエで来る日も来る日も描き続けた達磨達には、県内で重ねたリサーチの思い出の数々や、作家としての将来を予見する折りも込められたことだろう。今後の展開に期待したい。



2022.8.8 榛名湖 LAKE HARUNA



2022 8/2/ 榛名湖 Lake HALUNA

山本千愛（やまもと・ちあき）

2018年 群馬大学教育学部美術専攻卒業
2022年 東京藝術大学大学院美術学部先端表現科入学

2016年より「12フィートの木材を持ってあるく」というプロジェクトを開始。個人的な事柄や社会情勢に巻き込まれたり、通りがかりの人の協力を得たり、作者本人の想定し得ないエラーに直面したことを基に、生きること・移動すること自体が作品化されていく。

ホームページ <https://www.chiakiyamamoto.com/>

受賞歴

2021 群馬青年ピエンナーレ 2021 大賞
2020 TOKYO MIDTOWN AWARD2020 優秀賞・オーディエンス賞

主な展覧会

2022 「六本木アートナイト 2022」 東京都・六本木各所
「ATLAS 展」 東京藝術大学・取手キャンパス
2021 「群馬青年ピエンナーレ 2021」 群馬県立近代美術館
「黄金町バザール 2021」 神奈川県・横浜市
「TURN フェス6」 東京都美術館
「Street Museum」 東京ミッドタウン
2020 「TOKYO MIDTOWN AWARD2020」 東京ミッドタウン
「個展 生きるときのあれ、生きているときのそれ」 愛知県・名古屋市
2019 「個展 この扉の向こうでアーティストが居候しています」 群馬県・前橋市 ほか

パブリックコレクション 群馬県立近代美術館

伝説は現実のちよいと横にある

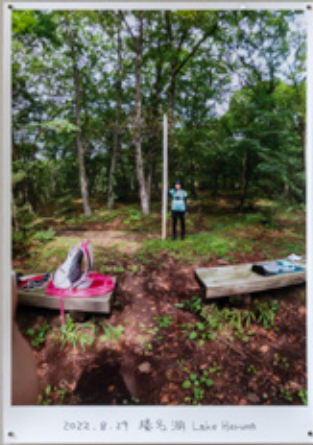
持ち歩かれた12フィートの木材、インクジェットプリント、道で拾ったりもらったりしたもの、榛名湖の環境音

群馬県高崎市にある榛名湖の伝説をテーマにした作品である。榛名湖には湖畔にまつわる様々な伝説がある。郷土の伝説のほかにも、漫画のモデルの地として聖地巡礼に多くの人が訪れることもある。そんな伝説の集う土地で、毎日欠かさず榛名湖畔を12フィートの木材を持って歩いていたなら、自分も榛名湖にまつわる伝説の一つとして加わることができるのではないかと思い、実行した1ヶ月の記録である。毎日湖畔を歩く中で伝説の収集も行った。すると次第に、伝説になりうる現在の榛名湖畔にまつわる実情が明らかになってきた。私自身が伝説に加わるはずが、榛名湖の後の伝説の種になりうる「現在の榛名湖の話」をよく知る語り部に自分になっていることに気がつく。それらの経験をもとにしたインスタレーション作品である。





2019.7.2 穂高湖



2022.8.17 穂高湖 Lake Hason



2021.7.24 穂高湖 LAKE HASONA



2020.9.27 穂高湖 LAKE HASONO



2022.8.20 穂高湖 LAKE HASONA



2022.8.20 穂高湖 LAKE HASONA



2019.8.27 穂高湖 LAKE HASONA



2022.9.7 穂高湖 LAKE HASONA





運営委員 / 跡見学園女子大学 茂木一司

アートとは「見えないものを見るようにすること」で、だから本当は「見えないもの」にこそ意味（本質）がある。アートしての Walking は「歩くことが歩く人と歩かれた道を構成し、そのこと自体が歩くことによって理解されていくという身体の状態を誘い込み、歩くことによって自身で見つけ出していく道によって変化する」。山本は自分の作品について、「自分の背丈を超えるモノ（12 フィートの角棒）を持ち歩くことで生まれるエラー」が「思いがけないことに出会わせ続けること」で、その「醍醐味は初対面に人とのコミュニケーション」にあると説明する。しかし、この説明は見える部分についてだけであって、見えない部分の説明は彼女自身の意識と無意識の（世界）との対話や葛藤の中で昇華されるか統合されている。つまり、歩くことによってしかわからないと彼女は暗にいうのである。

今回のプロジェクトで気づいたことのもう一つに、榛名湖の伝説との出

会いや歩きながら拾ったモノ、すなわち状況論でいう道具（コトバやツール）との関わり的重要性がある。「見えるモノ」が「見えない世界」を暗示させ、つくられる世界を無限に拡張させる。今回教育プログラムでは「モノとの対話＝モノぼけ？」をワークショップ化し、中学生等に体験してもらった。中学生たちは山本の行為を面白がりながら、彼女の世界観を自分たちにすり寄せながら、人モノコトがつくられる「共同／協働」を楽しんでいた。今回のプロジェクト全体を通して、アートが「関係的な生き生きとした生の社会的世界への知覚／アクセス」、すなわち探求活動であることの意味を感じ取ってくれたらいいなと思った。

参考文献：笠原広一&リタ・アーウィン編著『アートグラフィー 芸術家／研究者／教育者として生きる探求の技法』ブックウェイ、2019



小野澤弘一（おのざわ・こういち）

- 2019 中国ワークショップ（杭州 白塔林）
中国個展（上海 介末 craft）
- 2018 西武池袋本店アートギャラリー 個展
- 2017 麗水国際アートフェスティバル 2017（韓国 麗水）
15 young potters from Japan（アメリカ ニューヨーク）
有田国際陶磁器展入選
ミラノサローネ Knoll ショールームに作品提供
- 2016 Open to art 2016 Finalist（イタリア ミラノ）
第9回現代茶陶展 入選
- 2015 第8回現代茶陶展 入選
- 2014 現代茶湯アワード 2014 デザイン部門銀賞
- 2011 栃木県那須郡那珂川町で開窯
- 2008 多治見市陶磁器意匠研究所卒業
- 1983 東京都豊島区に生まれる

ホームページ <https://koichionozawa.com/>
インスタグラム onozawakoichi

石と水

陶、漆、錫、石、水

今回、真夏の藤岡市鬼石での滞在制作中、何度も三波川へ涼みに行きました。冷たい川の水に浸かり、石のゴツゴツとした感触を楽しみ、真っ青な空に包まれていると、自然と一体化したような感覚になりました。

「石と水」陶磁器の原料でもあります。

鬼石で滞在制作をするにあたり「石と水」をテーマにしたことは、陶芸家として自然なことだったように思います。

涼みに行っていたエリアには「原古墳」という積石の古墳がありました。

太古から現代までの鬼石の人々の暮らしに思いを馳せる機会にもなりました。

「現代性と原始性」私の陶磁器制作においてテーマの一つです。自分の世界観とも言えるかもしれません。

そんな自分の世界観に鬼石で感じたことを落とし込んだ作品です。







運営委員 / シロオニスタジオ キール・ハーン

私たちがシロオニスタジオ・アートレジデンスで行っているアートについて、少し考えてみたいと思います。美術は人間の営みの中で最も深い歴史を持つものであるにもかかわらず、現代では美術関係者以外には分かりにくく、とっつきにくいと思われがちです。私は、アート鑑賞やアート制作がもっと身近なものになればと思い、シロオニスタジオを運営しています。

AIRアートプロジェクトは、パンデミックが少し落ち着きを見せたころ、アートレジデンスの再開と同時に行われました。この機会に、2年以上会っていない友人や近所の人たちに声をかけ、再びアートレジデンスに参加してもらいたと思いました。そこで、日本で長い歴史を持つ陶芸というメディアを選び、穴窯で焼くことで、レジデンスの再開を皆で共有するプロジェクトにしようと考えました。小野澤さんを招聘したのは、彼の技術力の高さと、東京都青山にあるギャラリー「白白庵」を通じたお互いの繋がりがあったからです。

小野澤さんは鬼石に滞在中、町との交流活動を多く手伝ってくれました。毎日アトリエのドアを開け放ち、来訪者に快く作品の説明をしてくれました。陶芸ワークショップでは、70人近い参加者が、穴窯で焼く陶芸作品を制作しました。ワークショップに参加した方は、窯焼き、窯出し、そして展示会に訪れてくれました。穴窯は4日間、24時間窯を焚き続けなければならないので肉体的には大変な作業ですが、火を囲んで作業や食事、物語を共有し、新しい人間関係を築くコミュニティプロジェクトとなります。

また、窯焼き後の展示会では、華道家の塚越応駿（いけばな松風副家元）さんを招き、パフォーマンスを行いました。小野澤さんのリーダーシップと献身が、アートレジデンスの再開と人々との交流の鍵となったのです。



頭山ゆう紀（とうやま・ゆうき）

1983年千葉県生まれ。東京ビジュアルアーツ写真学科卒業。
生と死、時間や気配など目に見えないものを写真に捉える。自室の暗室でプリント作業をし、時間をかけて写真と向き合うことで時間の束や空気の粒子を立体的に表現する。

主な出版物に『境界線 13』（赤々舎 2008）、「さすらい」（abp 2008）、「THE HINOKI Yuhki Touyama 2016 - 2017」（THE HINOKI 2017）、「超国家主義 - 煩悶する青年とナショナリズム」（中島岳志 著、頭山ゆう紀 写真／筑摩書房 2018）がある。

ホームページ <https://yuhkitouyama.com/>

In fog

Gelatin silver print / Acrylic mounting, DVD 82min

榛名湖アーティストレジデンスに滞在する直前に母が突然亡くなった。普段通りに過ごして多様な場面で母を想うより、環境を変えて生活をした方が心を誤魔化せると思い、母の死を受け入れないまま滞在を始めた。榛名湖は霧が広がる静かな景色だった。

榛名湖には木部姫や渋川公夫人が入水し大蛇や竜になるという伝説がある。湖の中の生と死の間のようなものが見たいと思い、水中カメラで湖の中を撮影した。

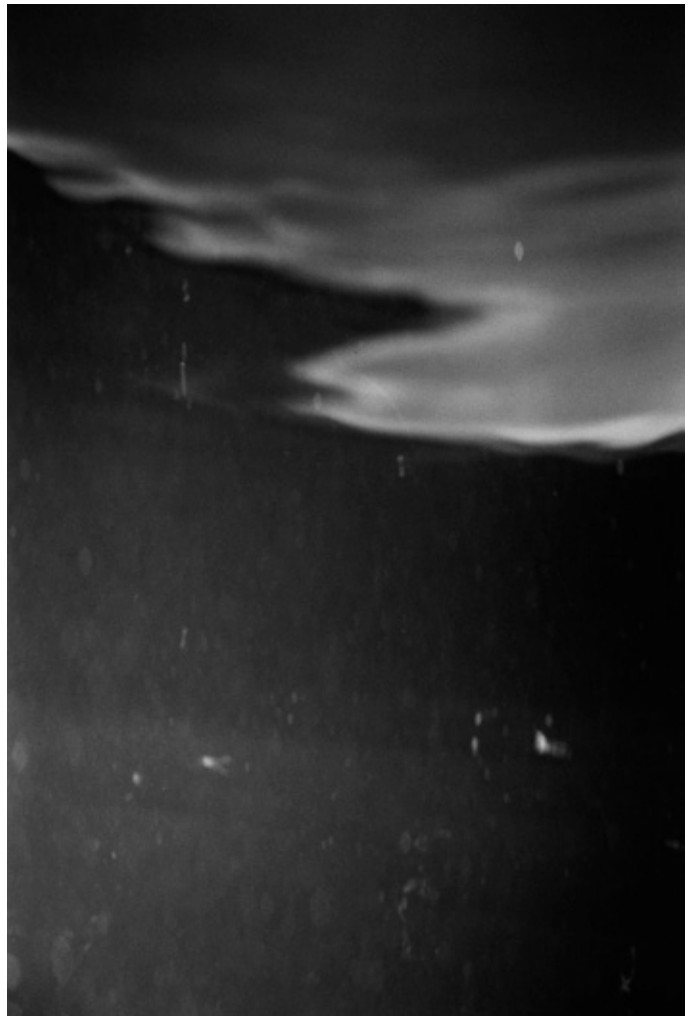
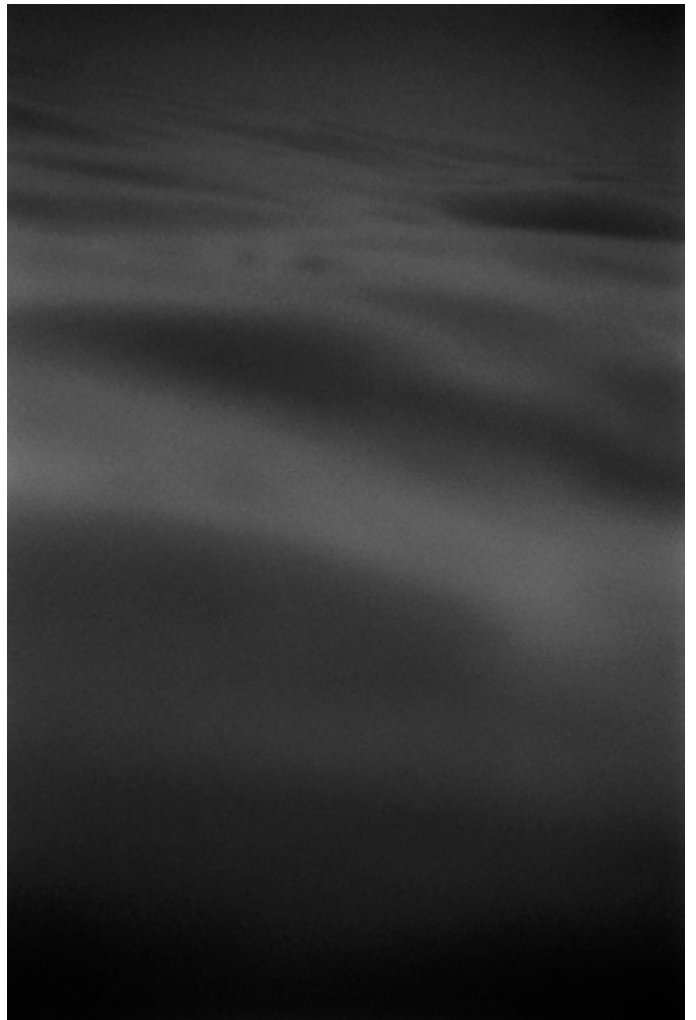
ネガ現像、暗室でのプリント作業と時間をかけて写真と向き合い、湖の中を立体的に粒子で表していく。

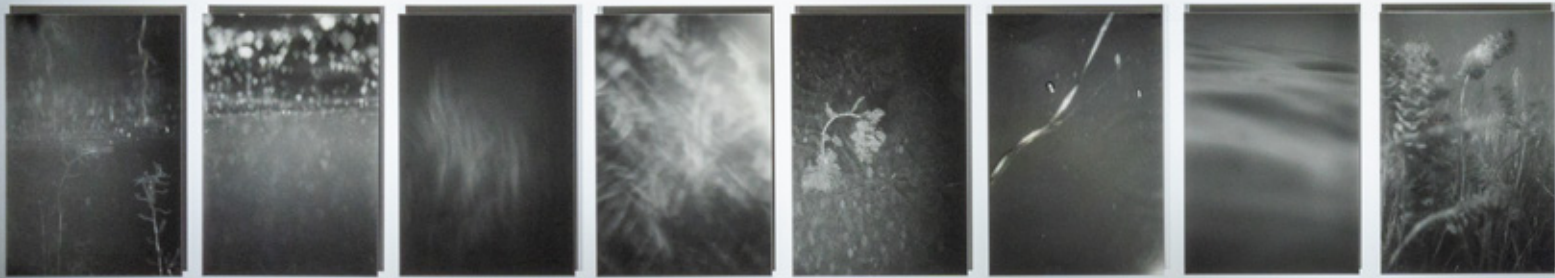
写真は目に見えない気配を写し、母の不在を現実にする。

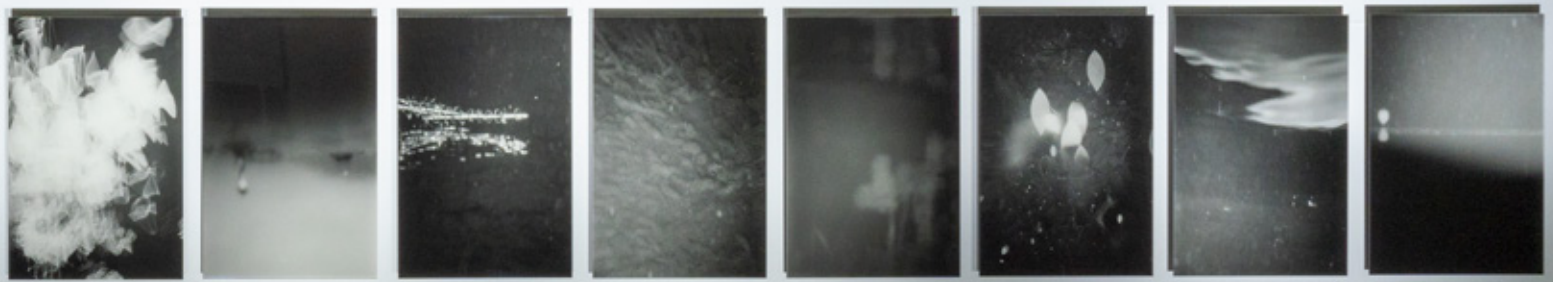
時間はただ過ぎていき、母との記憶は鮮明になる。

榛名湖の霧の中、湖を眺めながら母の不在と過ごした。









運営委員 / アーティスト 片山真理

10年前に頭山さんの作品と出会いました。カメラを持ち被写体を追うような、いつまでも待っているような「カメラを持つ者の存在」を感じさせるものの、気がつくとその存在が空間そのものになっている恐ろしさと静寂（そういうものはいつも気がつかないうちにやってきますね）を兼ね備えた作品という印象でした。そんな作品だけを知り、人柄を知らないというのは作品を観る上で非常に健康的だと思うのですが、数ヶ月前に初めてお会いした頭山さんご本人の印象は作品の通りである上に、打てば響く、叩けば響く、どんなものにも呼応していく柔軟さを感じました。

さて、滞在中に制作された「In fog」についてですが、展示場所、写真と映像というメディア、会期中に間に合わせ完成させた本など、短い期間や空間の制限に対して柔軟にサバイバルされていて嬉しく思いました。推薦者としてできることは推薦することだけですので、彼女の力によって構築された「作る環境」を感じ、AIRの醍醐味を彼女が体現してくれたようで感謝のきもちでいっぱいです。



佐藤令奈（さとう・はるな）

2008 多摩美術大学 美術学部 絵画学科 油画専攻 卒業
2020 愛知県立芸術大学 大学院 美術研究科 油画専攻 修了

受賞歴

2018 (財) 神山財団芸術支援プログラム 第5期生
2015 南京国際美術展 入選
2009 トーキョーワンダーウォール賞 受賞
2008 トーキョーワンダーシード 入選

主な個展

2021 「Border せかいのバランス」(VIENTO ARTS GALLERY, 高崎, 群馬)
2018 「體滷物語 Story of Skin」(Shun Art Gallery, 上海, 中国)
2017 「Slightly but quite different」(Gallery KIDO Press, 東京)
2014 「Solo exhibition」(Gallery le bain, 東京)
2012 「BABIES」(Gallery Bundo, 大邱, 韓国)
2011 「Baby, born from mother」(銀座三越, 東京)
2010 「トーキョーワンダーウォール都庁 2009」(東京都庁, 東京)
「東アジア共同プロジェクト 佐藤令奈展」(PHILIP KANG GALLERY, ソウル, 韓国)
2008 「肌の温度」(Gallery Art Composition, 東京)

主なグループ展

2022 「拝啓、移り住みまして 2022」(中之条, 群馬)
2021 「中之条ピエンナーレ国際現代芸術祭 2021」(中之条, 群馬)
2019 「佐藤国際文化教育財団 第28回奨学生美術展」(佐藤美術館, 東京)
2018 「若葉集」(藍頂美術館, 四川, 中国.)
2017 「中之条ピエンナーレ 2017」(中之条, 群馬)
2015 「中之条ピエンナーレ 2015」(中之条, 群馬)
2014 「肌の秘密 藤田嗣治×佐藤令奈」(銀座三越, 東京)
2013 「Body: Glimpses of Nature of Mind」(Shun Art Gallery, 上海, 中国)
2011 「Group Show」(MYRA GALLERIES, マイアミ, アメリカ.)
2010 「ロストジェネレーション 僕たちのわずれもの」(Bunkamura Gallery, 東京)
2009 「トーキョーワンダーウォール公募 2009 入選作品展」(東京都現代美術館, 東京)
2008 「トーキョーワンダーシード 2008 入選作品展」(トーキョーワンダーサイト渋谷, 東京)
パブリックコレクション: 高崎卸商社街協同組合

私の出身地である東京都北区滝野川から3千人あまりの子どもたちが中之条町に疎開をしていた。2つの作品は疎開児の記録や話をもとに制作した作品である。

箱をのぞくと

茶箱、せいろ、箱、木、紙、アクリル、顔彩、栗、くるみ、繭、南京豆、水晶、麻布、鉛筆、キャンバス、ミュウグラウンド、油彩

茶箱の中には疎開児の残した、たくさんの言葉からイメージをしたカタチが収められている。歴史を知ることはのぞくという行為に近いように思う。箱をのぞくとそこには私のがぞいた疎開の歴史がある。

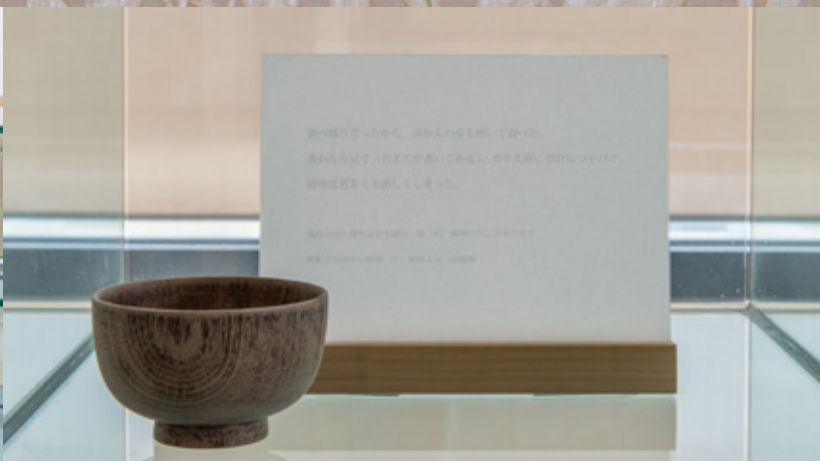
まよなかの好奇心

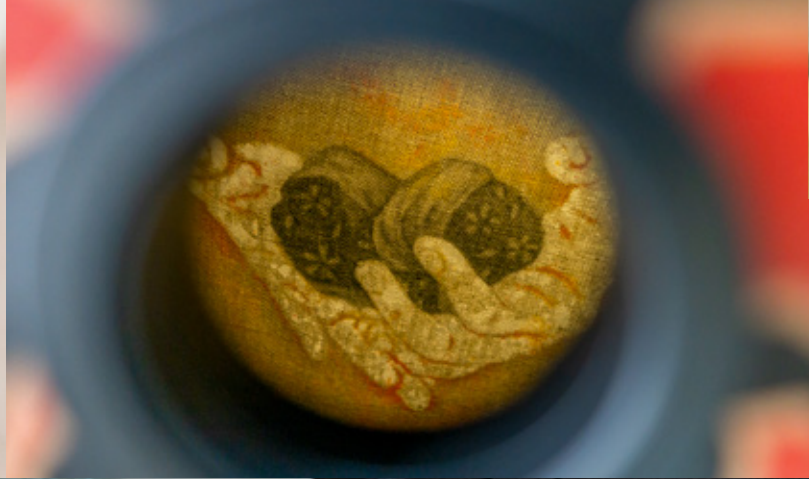
キャンバス、ミュウグラウンド、油彩

絵画作品は疎開を経験された方の話をもとに制作をした。「真夜中に疎開先の女子トイレで布をかぶり、トイレに来る女の子を脅かそうと待っている男の子がいた。男の子はひとりで待つ怖さより、驚いた反応が見たいという好奇心の方が上回っていたようだ。」という。疎開児の記録の中にはいくつもいわゆる“子どもらしい”エピソードを見ることができる。時代に影響されやすい子どもたちのなかに、いつの時代も変わらない“子どもらしさ”を知ることができる。

ホームページ <https://haruna-sato.tumblr.com/>
インスタグラム [haruna_sato](https://www.instagram.com/haruna_sato)

photo by Kazuyuki Miyamoto







運営委員 / アートディレクター 山重徹夫

佐藤令奈の出身地である東京都北区は、太平洋戦争後期中之条町の四万温泉への集団学童疎開が行われた歴史がある。この2つの土地に残された記録をリサーチして、近年は子供たちと土地の記憶をテーマにした絵画作品やインスタレーション作品を数多く発表している。

いままで、戦争をテーマとした作品を見る際、過ぎ去った古い記憶の断片を垣間見るような、どこかフィクションに近い感覚で見られることが多かったと思う。しかし、近年のウクライナ危機により、私たちの日常にも戦争の足音が間近に聞こえるようになり、セピア色であった作品が生々しく発色して、現実感を持ち始めたように感じる。

佐藤の作品に描かれている子どもたちは、皮膚の体温までも感じるかのように、ぬくもりが伝わってくる。そこには戦時中を生きた子どもたちと、現代を生きている子どもたちとの違いは感じられず、まるで同時代を生きているような生命感を感じることができる。現代の子供たちと変わらないように遊び、いたずらをしたり、泣いたり笑ったりと、その時代を生きた子どもた

ちの表情が伝わってくる。

作家の滞在制作が始まる前に、戦時中期中之条町へ学童疎開してきた子供たちと同年代の子供たちにもけて、対話型鑑賞プログラムをおこなった。疎開時に描かれた絵画を、いまの中之条町の子どもたちが鑑賞して感じ取ったものを、新たに制作する作品テーマとした。そして完成した佐藤の作品は、滞在中之条町のレジデンスでの展覧会で発表し、地元住民に向けて対話型鑑賞も行った。このプログラムにより、佐藤の作品はその土地の歴史や記憶を広く呼び起こし、はじめて作品鑑賞する地元住民にも、より深く理解するための手引きとなった。

今回のプログラムは、作家が作品を作り始めるところから、地域住民が鑑賞すること、その土地で行う意味を考えさせられる、とても貴重な機会だったと感じる。こうして、この土地で滞り制作した作品は、これからもこの場所の記憶と共に生き続けることだと思う。



主催：群馬県 公益財団法人群馬県教育文化事業団

後援：群馬県教育委員会

協力：榛名湖アーティスト・レジデンス（高崎市）

シロオニスタジオ（藤岡市）

中之条町アーティスト・イン・レジデンス（中之条町）

中之条ビエンナーレ実行委員会

写真 / デザイン 山重徹夫



